

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 10日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520438

研究課題名（和文） トルコ語と日本語の対照研究とその実践的応用

研究課題名（英文） Contrastive study of Turkish and Japanese and its practical application.

研究代表者

栗林 裕 (KURIBAYASHI YU)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：30243447

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、トルコ語と日本語の対照研究の方法論の確立のために、語形成や他動性などの文法の観点と言語教育などへの実践的応用の観点の2つの側面からアプローチを試みたものである。文法の観点からは、日本語に見られる複合動詞の形成パターンや他動性の概念が、同じような語順やアルタイ型の形態法を持つトルコ語のそれとは異なる点についての詳細を明らかにした。実践的応用の観点からは、文法の観点から得られた見通しが、実際に日本語やトルコ語を学ぶ母語話者の教育の現場において有効なものであることを明らかにした。以上の研究目的のいずれについても、本研究成果として国の内外で口頭発表や学術論文および学術研究書の出版を通して精力的に発表した。

研究成果の概要（英文）：

Aims of this research project are to develop the methodology of contrastive study between Turkish and Japanese with respect to the grammatical point of view and to apply to the second language education. From the former point of view, the word formation process of verbal compounds and the notion of transitivity of verb in Japanese are different from those of Turkish, although both of the languages have object-verb syntax and Altaic morphological type. From the latter point of view, our results are valid for the application of second language acquisition of both Japanese and Turkish speaker. Our findings are published in academic books and journals, and presented in International Conferences held in the Republic of Turkey and Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	39,000	1,690,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：トルコ語 日本語 対照研究 形態論 意味論 複合動詞 言語教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の日本語と他言語の対照研究は、ほとんどの場合、日本語と英語の対照に終始しており、日本語と他言語の対照は質的にも量的にも十分なものとはいえない。この理由は、1) 対照研究に携わる研究者の関心が、日本語と英語に偏っていること、そして、2) 日本語と英語以外の個別言語の研究に携わるものの関心が対照研究に関心がないことによる。

(2) 研究代表者はトルコ語をはじめとするチュルク系諸言語の言語記述に関心を持ち、今まで主にこれらの言語の記述的および理論的研究を行ってきたが、その際に日本語学で蓄積された対照研究の理論的方法論をトルコ語に適用し、英語との対照で考えられてきたことがどれだけ有効であるかを検証する必要があると考えた。

(3) トルコ語と日本語をめぐる文法研究の諸問題について、対照言語学的な観点から、詳細に検討し、その成果の実践的応用として第二言語として日本語を学ぶトルコ語話者の言語教育への応用的研究も同時に考えなければならない。

2. 研究の目的

(1) 文法の観点からは、「する」的表現と「なる」的表現の区別がトルコ語文法の中で、有効な対立概念であると認識されるか、あるいはそれとは別の枠組みが必要になるのかという点について実証的な言語データを蓄積しつつ、解明する。

(2) 実践的応用の観点からは、文法の観点から得られた見通しが、実際に日本語を学ぶトルコ語母語話者の教育の現場において有効なものであるかどうか検討する。

(3) 従来、日本語との対照が英語という個別言語に偏ってきた状況に対して、英語以外の他の個別言語、特に日本語と構造的に類似した言語すなわちトルコ語からの考察が必要で

あることを検討する。

3. 研究の方法

(1) トルコ語と日本語の統語法および形態法に見られる文体表現的および文法的異なりについて、先行研究を踏まえつつ、仮説をたてる。この仮説とは、従来、日英語で議論されてきたスルとナルの二項対立的なもの捉えるだけでは両言語の記述的な一般化には不十分で、それぞれの言語に特有の文法範疇の確立している度合いや名詞の意味構造の本質的な異なり等が関連することを主張するものである。

(2) 理論の構築にあたってはトルコ在住の研究協力者と頻繁に討議を行い慎重に進める。次の段階として仮説が実際の言語教育の場で得られる言語事実と整合しているかどうかの検討に進む。具体的にはトルコや日本の大学で日本語を学ぶトルコ人話者の産出する日本語の言語資料や、日本でトルコ語を第二言語として学ぶ日本人の言語資料を検証に使用し、それに対して統計的分析を施す。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究の目的の柱は、文法の観点とその実践的応用の観点の2つの側面からアプローチを試みるものであり、文法の観点からは、日本語に見られる複合動詞の形成パターンがトルコ語のそれとは異なる点について解明した。実践的応用の観点からは、文法の観点から得られた見通しが、実際に日本語を学ぶトルコ語母語話者の教育の現場において有効なものであるかどうか検討した。研究の柱のいずれについても、研究成果を口頭発表や学術論文や学術研究書として発表した。

(2) 国内外での位置づけとインパクト

国内では国立国語研究所によるレキシコンや他動性についての共同研究プロジェクトの枠組みの中で、複合動詞や自他動詞の対照研究を精力的に推進した。また国外のトルコ人研究協力者と共に本研究課題による対照的研究の実践的応用の具体例として、対照研究を日本語教育で実践した成果をトルコで開催された国際学会で共同発表としてまとめ、発表した。学会では多くの参加者の注目を集め、当学会から出版予定である研究成果の掲載雑誌の査読者からは、初めてのトルコ語と日本語の本格的な対照研究の成果として好意的なコメントを得た。

(3) 今後の展望

本研究は、対照という観点から複合動詞や自他動詞だけでなく、文法の他の領域にも適応可能なものであり、今回解明できた部分は全体の一部分にすぎない。また実践的応用の観点からは、文法の観点から得られた見通しが、実際に日本語を学ぶトルコ語母語話者の教育の現場において有効なものとするためには、さらに応用的な研究を進めていく必要がある。本研究で採用した誤用分析だけでなく、さまざまなアプローチが可能であろう。今後、関連研究者との共同研究などを通してさらに研究を深化させる必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Kuribayashi, Y. and Z. Gençer, Japonlara Türkçe Dilbilgisi Öğretirken Karşılaşılan Sorunlar Üzerine, 4. Uluslararası Türkçenin Eğitimi-Öğretimi Kurultayı, 査読有、出版予定

- ② Kuribayashi, Y., Turkological studies in Japan -Past and Present-, 3. Uluslararası Türkiyat Araştırmaları Sempozyumu, 査読有、2011、523-530

[学会発表] (計12件)

- ① 栗林裕、日本語とトルコ語の複合動詞の対照、国立国語研究所 日本語レキシコン共同研究プロジェクト、平成23年12月24日、関西学院大学梅田キャンパス
- ② Kuribayashi, Y., Transitivity in Turkish, International Workshop “Transitivity and its related phenomena”, 2-4 December 2011, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
- ③ Kuribayashi, Y., Japonya’ daki Türkoloji Araştırmalarının Geçmişi, Bugünü ve Yeni Arayışları, Dil Bayramı, 26-27 September 2010, Türk Dil Kurumu (トルコ言語協会)

[図書] (計3件)

- ① 栗林裕、溪水社、チュルク諸語研究のスコープ、2012、5-20
- ② 栗林裕、くろしお出版、自動詞・他動詞の対照、2010、69-90
- ③ 栗林裕、くろしお出版、チュルク語南西グループの構造と記述、2010、362

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗林 裕 (KURIBAYASHI YU)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：30243447

(2) 研究分担者

()
研究者番号：
()
研究者番号：
()
研究者番号：
()
研究者番号：

(3) 連携研究者

ゲンチェル・ゼイネップ (Gençer . Zeynep)
トルコ共和国・パムツカレ大学・講師
研究者番号：